

花園大学日本文学論究 第十六号 二〇二四年三月 抜刷

谷崎潤一郎「蘆刈」論

——「わたし」の認識から考える——

福田博則

谷崎潤一郎「蘆刈」論

——「わたし」の認識から考える——

福田博則

はじめに

「蘆刈」は昭和七年、『改造』の十一月号、十二月号に発表された。この前年に谷崎は、主要な作品に数えられる「吉野葛」、「盲目物語」を発表していた。昭和八年には代表的な作品の一つである「春琴抄」を発表する。河野多恵子の言葉を借りれば「大噴火の創作期」^①ともいふべき活躍の様相を呈することになる。「蘆刈」はそういった時期に書かれた作品である。

「吉野葛」や「盲目物語」、「春琴抄」といった作品群に比すると、「蘆刈」の存在はやや地味である。京阪神間の水無瀬にある中州を舞台として、谷崎に比定される「わたし」がこの地を散策していく。そして、突如現れた蘆間の男より、その父芹橋慎之介と、お遊さんなる女性との恋物語を聞くという話である。

当時の谷崎は、「乱菊物語」、「盲目物語」、「武州公秘話」といった、歴史を題材とした小説を数多く執筆していた。前述の「吉野葛」もこの系譜に連なるものであったが、「蘆刈」はやや様相を異としている。初めこそ後鳥羽

院や菅原道真といった人物に触れて歴史のことを物語っているが、途中から蘆間の男が語る話の方へ内容がシフトしていく。そこには後年の「春琴抄」に見られる、自傷による失明のような、ショッキングな内容は見受けられない。同時代評を見返しても芳しいものは見受けられない。里見弴は「最近の諸作のうち、特に優れたといふほどのものではない」と述べ、川端康成も「たわいないといふ外はない」と否定的な見解を示していた。⁽³⁾これは「春琴抄」が「聖人出づると雖も、一語を挿むこと能わざるべし」と云った感に打たれた⁽⁴⁾、「ただ嘆息するばかりの名作で、言葉がない⁽⁵⁾」と評価されたのとは対照的である。

しかし、「蘆刈」は、研究者の間で様々に議論を呼んだ作品である。「蘆刈」の研究史に大きな一石を投じたのは作家秦恒平であった。秦は「お遊さま―わが谷崎の『蘆刈』考」(『海』8巻7号 中央公論社 昭和五十一年七月)で「蘆刈」について語り、その中で、お遊さんが、実は蘆間の男を産んだ生母だとする論を展開した。その後、大里恭三郎が「谷崎潤一郎『蘆刈』論―絶妙な話術―」(『常葉学園短期大学紀要』第十五巻 昭和五十八年)で「氏の緻密な分析は、蘆間の男が間違いなくお遊さんの子であることを見事に証明していた。」と秦論を追認した。

この時期と前後して、蘆間の男が何者なのかということに、「蘆刈」の研究指針が向けられるようになった。永栄啓伸、たつみ都志といった研究者が「蘆刈」について触れ、論を展開した。永栄啓伸は「『蘆刈論』―その構造と内実―」(『日本近代文学』第四十一集 平成元年一〇月)で、蘆間の男が最後に姿を消したことは彼が亡霊だからとし、蘆間の男が芹橋慎之介の亡霊であると結論付けた。たつみ都志は、「継母思慕構造としての『蘆刈』」(『昭和文学研究』五巻 昭和五十七年六月)を発表し、秦の説に疑問を呈しながらも、「母恋い小説」としての「蘆刈」の要素に目を向けて、お遊さんは男にとっての継母的な存在、記憶の中に刷り込まれた「母」という立場を取った。同様のことは辻憲男も「巨椋池の月見―谷崎潤一郎『蘆刈』を読む」(『神戸親和女子大学研究論叢』三十二巻

平成十一年)で述べ、男の母は「お遊さん」ではないとしながらも、父慎之介にとつての「妻」、蘆間の男にとつての「生まぬ母」であったとする。

また、蘆間の男の「語り」についても目が向けられ、この面からも蘆間の男の正体について論考がなされた。川島淳史は「『蘆刈』 試論―偽装の語りと〈水無瀬見聞記〉」(『駒沢國文』第三十二卷 平成十二年)で舞台となる水無瀬周囲の状況と男の「語り」を詳細に点検し、最後男が姿を消したのは「語り」の嘘が発覚したためであつて、蘆間の男は芹橋慎之介が偽装した亡霊だとした。この論の中で川島は舞台となった水無瀬とその周辺について詳しく調査を行っている。先述した辻も同様の調査を、巨椋池に特化して行っている。この分野では塩崎文雄の労作『蘆刈』余影」(『日本文学』巻41号12号 平成四年十二月)があり、水無瀬だけでなく、作品の舞台となった年代及び気象についてまで、詳細に調査をしている。特に月日の特定については瞠目すべきものがあり、作品発表よりも三年前の、昭和四年九月を作中の年月として特定している⁶⁾。

様々な論が輩出した「蘆刈」であるが、蘆間の男が何者かという点についてはいまだ明確な結論が出ていない。この問題については『国文学 解釈と教材の研究』學燈社 第三十八卷十四号 平成五年十二月)で平野芳信によつて「男の母が誰かという議論からはそろそろ距離をおき」という提言がされており、論とするにはいささか古びた内容なのかもしれない。日高佳紀も「『蘆刈』論―記憶の中の『遊』女」(『日本近代文学』五十卷 平成六年五月)で、「蘆刈」の語りの特質に触れて、このために蘆間の男が誰の子かという問いかけは無効になると述べた。こういった向きもある「蘆刈」ではあるが、これまでも多くの論が輩出された作品であるため、触れてみる価値はあると考えられる。そして蘆間の男が何者であるのかという点について、一つの可能性を示してみたいと考える。

一 蘆刈の年立てと「わたし」の認識

「蘆刈」は作中の舞台の年代が判然としない。作品の発表そのものは昭和七年の十一月、十二月なので、昭和初期であることには疑いが無いだろう。では、具体的にはどの年代なのか。先に取り上げた塩崎文雄の『蘆刈』余影に頼りながら、以下この点を考える。

「蘆刈」本文には次のようにあり、ここから、物語が「わたし」によって語られている現在が特定できる。

げんざいではその江口も大阪の市内にはひり、山崎も去年の京都市の拡張以来大都会の一部にへんにふされたけれども（略）まだしばらくは草ぶかい在所のおもむきをうしなふことがないであらう。

京都市が合併によって拡張されたのは昭和六年であり、そのことを作中で「去年」と記しているから、物語が語られている時間は、昭和七年と、作品が発表された時代と一致する。しかし、「蘆刈」の最初に「まだおかもとにすんでいたじぶんのことであつた。」とあるので、作中の時間は昭和七年を含む、「蘆刈」が語られている現在よりも過去のことになる。

もう一つ、年代を特定するための重要な存在が、「新京阪鉄道」である。現在の阪急京都線はこの会社によって建設された。天神橋から京都西院の区間が全通したのは昭和三年の十一月のことであつた。⁽⁵⁾ 作中では「やまざさまでなら汽車で行つてもすぐだけれども阪急で行つて新京阪にのりかえればなお訳はない。」とある。「わたし」がど

これから阪急電車に乗ったかを考えると、可能性が高いのは現在の阪急神戸本線の岡本駅であろう。わざわざ「まだおかもとにすんでいたじぶん」と書かれているので、岡本駅以外から阪急に乗ったことは考えにくい⁹⁾。その後、当時は「新京阪」と呼ばれていた鉄道線に乗り換え、大山崎駅で下車したと考えられる。これも既に「蘆刈」余影」に指摘があるが、阪急の大山崎駅で下車が物理的に可能であるのは昭和三年の十一月以降である。十一月は作中で示されている「あるとしの九月」ではないので、「わたし」が仲秋の名月を見ることができたのは昭和四年から昭和七年の間ということになる。先論の塩崎は「蘆刈」余影」の中で、「わたし」を谷崎本人と結び付けて、昭和六年と七年が「まだおかもとにすんでいたじぶん」に抵触するとして、可能性から外している。また、昭和五年であれば、「あるとしの九月」という表現がおかしいと指摘をする。物語を語っている時間が昭和七年であることは判然としており、そこを起点として考えれば、昭和五年のことを書くのに「おとし」と書くはずだと塩崎は指摘する。肯んじる部分も多いが、作中の「わたし」と作者谷崎が完全にイコールというわけではないので、昭和六年と七年が「おかもとにすんでいたじぶん」に抵触するとは言い難い。作中の「わたし」が昭和六年もしくは七年の九月に「おかもと」に住んでいたかもしれないし、その可能性は否定できないからである。

一つ、年月を特定できるかもしれない要素がある。それは先述した「新京阪鉄道」である。先ほどにも述べたが、「わたし」が乗った新京阪鉄道は、昭和三年十一月に天神橋から西院間区間が開通している。ところが、昭和五年の九月十五日をもって、新京阪鉄道は京阪電気鉄道に吸収合併されている¹⁰⁾。となれば、昭和六年と七年の時点では、この鉄道路線は既に京阪電気鉄道の路線であり、「わたし」が言う、「阪急で行って新京阪にのりかえ」という記述はこれに矛盾する可能性がある。同様の発言が蘆間の男にもあり、「例年ならば京阪電車で出かけますところをこ」として廻りみちをして、「新京阪へ乗りまして」とあるが、「京阪」に乗らず、「新京阪」に乗ることが可能なのは昭

和四年と五年に限定されてしまうのである。

また、先ほどの塩崎の論に従えば、昭和五年を作中の舞台の年月とするのは「あるとしの九月」という表記がおかしくなるので、昭和四年が可能性として濃厚になる。塩崎は『「蘆刈」余影』で昭和四年を「まだおかもとにすんでいたじぶん」という観点から導きだしていたが、新京阪鉄道が存在するという観点からも、この昭和四年が可能性として考えられる。とはいえ、この説に異論が挙がるかもしれないので、本論では昭和四年から昭和七年という幅を取って考えていきたい。

次は、「わたし」がどうしてお遊さんの年齢を知りえたかという点について考察をする。最後に「わたし」は「でも、うお遊さんは八十ぢかいとしよりではないでせうか」と発言する。その発言によって、蘆間の男は姿を消し、物語は閉じられてしまう。

「わたし」が「お遊さん」の年齢を、だいたいではあるが知ることができたのはなぜだろうか。「蘆刈」は年代の全てが曖昧で、登場人物の年齢もおおよそでしかわからない。「お遊さん」にしても、「二十二、三のとしにはもう若後家になっていた」という情報が最初に「わたし」に対して語られ、次に「そのころは明治初年のこと」と語られる。この二点によって「わたし」は「お遊さん」の年を推定したのだろうか。ここでは昭和四年から昭和七年という年月の可能性を残しながら考察したい。

まず、「八十ぢかい」という「お遊さん」の年齢だが、言葉通りに考えると七十七歳から七十九歳と考えられる。この幅を考慮して、昭和七年に七十九歳であるパターンから、昭和四年に七十九歳のパターンまで（図表1）を作成して、可能性を考えてみる。このパターンで考えると、お遊さんが「二十二、三のとし」の「明治初年」というのは、明治五年から明治九年の間になる。

(図表1)

	お遊さんの年齢				
昭和7年	79				
昭和6年	78	79			
昭和5年	77	78	79		
昭和4年	76	77	78	79	
明治9年	23	24	25	26	27
明治8年	22	23	24	25	26
明治7年		22	23	24	25
明治6年			22	23	24
明治5年				22	23
明治4年					22

ただ、物語中の「わたし」は、蘆間の男と出会った年月を当然知っている。我々はその年月を完全に知ることはできないのだが、とりあえず仮に先ほど述べた昭和四年に定めて考えてみる。昭和四年に「八十ぢかい」七十七歳から七十九歳の間であったとすると、「明治初年」が明治五年から明治八年の範囲が可能性として考えられる。

「わたし」は本当にお遊さんの年齢を推定できるのか。まず、お遊さんの年齢の起点として情報提供がされたのが、「明治初年」に二十二歳もしくは二十三歳ということである。「わたし」は作中の年代を知りえているので、「明治初年」が具体的に明治何年かを認識できれば、そこを起算点として、お遊さんの年齢を知ることができる。

しかし、ここで問題となるのが「明治初年」の概念である。「初年」は実は具体的な年代を特定するものではない。

『大辞林』（三省堂 昭和六十三年十一月）に拠れば、「ある期間の、はじめの頃。」とある。『国語大辞典』（小学館 昭和五十六年十二月）も同様に「ある期間のはじめのころ」とあり、明治初年が何年かという具体的な数字は、この語句からは判別できないのである。

この点についても少し深く考えるため、「蘆刈」が発表された昭和七年付近の出版物に使われている「明治初年」の使用例を考える。『国民総合日本史』（栗田元次 中文館書店 昭和七年）を見ると、第2章の題名に「明治初年に於ける隣邦との関係と領土の確定」とあり、この章段では明治六年までが明治初年として扱われている。同じく昭和七年の『日本精神発達史』（河野省三 大岡山書店）の中にある「明治初年の二大思潮」という初段では明治十年までを「初年」として扱っている。この二冊だけを見ても「初年」の扱い方に大きな差があり、それぞれが「初年」を別々の幅でとらえている。

「明治初年」という語句に対して、一般的かつ具体的な数字というものが存在するならば、「明治初年」から起算して、「わたし」はお遊さんの年齢を推定できるはずである。しかしそのような具体的な数字は「明治初年」から導き出せない。先ほど仮定した昭和四年のケースで考えてみても、「わたし」が「明治初年」を明治五年から明治八年だと認識できていないと、お遊さんの年齢を推定できない。したがって、「わたし」が「明治初年」にお遊さんが「二十二、三」という情報を知ったところで、お遊さんの年齢を「八十ちかい」と推定することはできないはずなのである。つまり、この情報だけでは、「わたし」が「でも、うお遊さんは八十ちかいとしよりではないですか」と発言することは、作中に述べられただけの内容からは矛盾する出来事なのである。

二 蘆間の男の年齢から考える

次に、お遊さんの年齢を「わたし」が推察できるもう一つの可能性を考えてみる。それは、蘆間の男の年齢からお遊さんの年齢を「わたし」が推察したのではないかということである。

蘆間の男が「わたし」に語る、お遊さんに関する情報は、「お遊さんが二十七のとし」に、お遊さんの子が病死し、このことが原因となって「離籍の件がまとまった」ことになる。そして、お遊さんの兄が「一年ほどたちまして再縁をすすめた」ことで、伏見の造り酒屋の主人の所へ再縁する。この時の具体的な年齢は記されていないが、一年が経過しているのので、二十八歳と思われる。

蘆間の男はお遊さんと自身について次のように語る。

わたくしはおしずの生んだ子なのでござります。父はお遊さんとそんなふうにして別れましてからながいあいだの苦勞をおもいまたその人の妹だといふところにいいしれぬあわれをもよおしましておしずとちぎりをむすびましたのでござります。

男の言葉を受け取れば、最短で考えてお遊さんが二十九歳の時に、おしずが蘆間の男を産んだ計算になる。その時点でのお遊さんの年齢に物語の舞台における蘆間の男の年齢を加算すれば、「わたし」はお遊さんの年齢を推定できるはずである。

しかし、作中で蘆間の男の年齢は語られない。それでも蘆間の男の年齢が推察できる要素は二点ある。一つは、蘆間の男が「七つか八つ」の時、その父に連れられて、巨椋池へお遊さんを見に行つたという経験が語られるものである。このことを蘆間の男は「なにしろ今から四十何年の昔のこと」と述べる。「四十何年」も含みのある言い方である。「何」という語句についても「どれが相当するのか、はっきりしない物事をさして問う語」、「不特定の事柄を観念的に指示する。」とあつて、具体的な数字は特定できない。しかし、不定ながらも数年ということ、二年乃至三年の程度であると考えられるから、四十二から四十三年の間であることは推察できる。七、八年という数字を加えて蘆間の男の年齢を考えると、四十九歳から五十一歳の間と考えられる。

もう一つ、蘆間の男の年齢を想像させる記述がある。それは「わたし」が「よわい五十に近」ということで、蘆間の男が「としはわたしと同年輩ぐらいであろう」と察する部分である。この記述から考えても、蘆間の男の年齢が、四十九歳から五十一歳の間と考えられる。以下、お遊さんが二十九歳の時に蘆間の男が生まれたとして、お遊さんの年に蘆間の男の年齢を足して考えてみる。

蘆間の男の年齢が四十九歳から五十一歳の間となれば、そこにお遊さんの年齢二十九歳を加え、数え年の計算方法で考えると、「八十近い」というお遊さんは七十七歳から七十九歳の間になる。詳しくは(図表2)を参照されたい。

(図表2)

お遊さんの年齢		蘆間の男の年齢
79	80	51
78	79	50
77	78	49
76	77	48
30	31	2
29	30	1

これは「八十ぢかい」という記述に丁度当てはまる。となれば、たとえ「わたし」が蘆間の男の年齢を正しく知らなくても、お遊さんが「八十近い」ということを想像し、発言することは可能なのである。

だが、この理論にも大きな落とし穴がある。それは、二十八歳でお遊さんが再縁した後、「ちぎりをむす」んだ妹おしずが、すぐに蘆間の男を宿し、翌年に出産をしないとこの計算は破綻をする。また、ここで、産んだのは必然的におしずになる。お遊さんが再縁後に蘆間の男を出産することはないのだから、この時に出産したのはどうしてもおしず以外にはありえなくなる。

当たり前だが「わたし」はおしずがお遊さんの再縁後すぐに、おしずが蘆間の男を宿したことを知りようもない。

それなのに「わたし」はなぜお遊さんの年齢を言い当てることができたのか。たった一年の違いがあっても、例えばお遊さんが三十歳の時に蘆間の男が生まれても、この計算は成立しなくなる。(図表2)を見れば判るが、一年の遅れが生じると、蘆間の男が五十一歳であった時にお遊さんは八十歳になってしまうので、「八十近い」という推察をわたしが行うことは不可能になる。例え「わたし」の発言が、秦恒平の言う通り「わたし」の「都合点」^(註5)としても、お遊さんが八十を超えている可能性もある以上、「わたし」はなぜそのように発言ができるのか。

「八十ちかい」と「わたし」がお遊さんの年齢について言及できるのは、蘆間の男がお遊さんの再縁後、ちぎりを結んだおしずがすぐに妊娠し、出産をしたという、蘆間の男でなければわからないはずの出来事を、「わたし」が知っていたとしか考えられないのである。

ただ、この時の「わたし」が、物語を書いている「作者」そのものであるならば、「わたし」が知っていたとしても理解はできる。これまでの「蘆刈」の研究史の中では、「わたし」と「作者」の存在は同一であると考えられていた。しかし、この物語が、現実にはありようもない話である以上、「わたし」と「作者」が同一であるはずもない。だから、「まだおかもとにすんでいたじぶん」が昭和六年の冬までのことを理由にして、「蘆刈」の舞台の年月から、昭和七年を排除することはできない。事実、この論考の中では昭和七年というのも一つの可能性に入れて論じてきた。

しかし、ここでお遊さんの年齢を「八十ちかい」と判断する「わたし」に、全てを知っているはずの作者の姿が急に重なるのである。

実は、この齟齬は、「蘆刈」の前年に執筆された「吉野葛」にも現れていた。「吉野葛」も、「わたし」が物語を紹介する役割を担い、作品の執筆時よりも二十年前の吉野を旅していく。「吉野葛」の「わたし」と作者も当然別

個であるはずだが、実は作中で両者は唐突に重なり合う。蓮實重彦の『魅せられて』（河出書房新社 平成十七年七月）に指摘があることだが、書かれている内容が、直接「わたし」が目にした知識としてしか読みようがない記述が「吉野葛」においてなされる。

蓮實が問題にするのは、吉野の地名である「中の千本」についてである。「吉野葛」では「近頃は、中の千本へ自動車やケーブルが通うようになった」という記述に対し、「吉野葛」を書くために、谷崎潤一郎が中の千本に滞在していた事実を指摘し、この記述に、谷崎の日々の体験が現れているとする。

ここには、物語が語っていない作者がまぎれもなく存在しており、「書く」人としてまぎれもなく機能していることで、話者と作者との関係を修復しがたい行き違いに陥らせている。

「蘆刈」も「吉野葛」のケースと同様であると考えられる。「わたし」がお遊さんの年齢を推察できたのは、作者しか知りえないことを「わたし」が知っているためであり、だからこそ「八十ぢかい」という言葉を「わたし」が発したのである。

では、どうしてここで「わたし」は「八十ぢかい」という言葉を発したのか。むろん、意味あつての行動であり、それは「蘆刈」という話を閉じさせるためであった。

谷崎は最晩年の『雪後庵夜話』（昭和三十八年）で、この「蘆刈」の結末について語っている。やや長くなるが、必要と思われるので次に引用をしてみる。

「蘆刈」を書いた時、

まだをかもとに住んでゐたじぶんのあるとしの九月のことであつた。

と云ふ書き出しで、「増かがみ」の水無瀬の宮のことを記した「おどろのした」の抜粋のあたりから、淀川の渡船場から蘆荻の生ひ茂る中洲の景色、

やはり葦のあひだに、ちやうどわたしの影法師のやうにうづくまつてゐる男があつた。

のあたりまでは、この先これがどう云ふ風に發展するか、まだ着想がはつきりした形を取つてゐなかつた。するうち次第に考が纏まつて行つて、

……さういつてそのをとこはしやべりくたびれたやうに言葉をとぎつて腰のあひだから煙草入れを出したので、いやおもしろいはなしをきかせていたゞいてありがたうぞんじます

のあたりまではすらくと運んで行つたが、主人公の「わたし」と、「そのをとこ」と、「お遊さん」との結末を、如何にして收拾すべきかについては、最後まで巧い思案が浮かばず途惑つてゐた。が、

たゞそよ／＼と風が草の葉をわたるばかりで汀にいちめん生えてゐたあしも見えずそのをとこの影もいつのまにか月のひかりに溶け入るやうにきえてしまつた。

とする思ひつきが突如として閃き、潤一郎全集第十九巻のページ数で四十七八ページの長さの物語がこゝで急に十行程で器用に終りを告げることが出来た。「あの物語をあゝ云ふ形で終らせる考を、作者は最初から持つてゐたのではなかつたゞらう。どうして終らせたい、か困つてゐて、運よく最後に名案が浮かんで飛びついたのでらう」と、当時凶星を刺したのは久保田万太郎君であつた。さう云ふ内情はやはり作家同士でなければ、一般の批評家には看破出来ないであらう。

不意な終わり方は、「蘆刈」の舞台となつてゐる時間軸における、お遊さんの年齢を「わたし」が指摘するものであった。この問いかけに蘆間の男は答えず、姿を消してしまふ。それまでも蘆間の男が語る物語に対して、「わたし」が問いかける場所は二か所あつた。「するとあなたがお父上にそのじゅばんを見せておもらいになつた時はもうよほど成人しておられたのでしょねとそのものがたりにそれまでだまつて耳を傾けていたわたしがたずねた」と、「なるほど、ではうかがいますけれどもお遊さんとお父上とのかんけいが仰っしゃるとおりであつたとするとあなたは誰の子なのです。」とある部分である。前の問いかけに対しては、男は「いいえ」と否定し、後の問に対しては、長く言葉を尽くした結果、「わたくしはおしずの生んだ子なのでござります。」と答えを返してゐる。しかし、「わたし」が発した最後の質問には答えることができなかった。¹⁶ 答えることができなかったのは、返答すれば「事実」を認めることになるからである。蘆間の男は自身が消えることで、「よわい五十に近い」「わたし」と同年輩の自身の存在を消し、同時に「八十ぢかい」はずのお遊さんの存在も消してしまふ。

かつて上田真は「日本文学における『終わり』の感覚」と題した講演の中で、幾つかの日本文学の代表的作品を挙げて、その「終わり」について言及した。¹⁷ そして、第三のパターンとして夏目漱石の「吾輩は猫である」を取り上げて、語り手である猫が死ぬことで物語が終わることについて次のように述べた。

小説の語り手である猫が死ぬのですから、一応ここには強い終結感があると考えられますが、しかしその反面、小説内部からみますとここで猫が死ななければならない必然性は何もありません。

「蘆刈」について目を向けると、語り手である蘆間の男が退場するために、ある種の必然性が求められたと考え

られる。そのため、作者は「わたし」に、蘆間の男が答えることができない質問を投げかけた。答えることができない質問となるためには、「わたし」が、すべてを見通した事実を語る必要があった。それが「もうお遊さんは八十ちかいとしよりではないでしょうか」であった。そして、「お遊さん」が八十近い年齢になるためには、彼女が再縁した一年後に、彼女の妹が蘆間の男を産む必要があった。そういった部分は、「蘆刈」の中で巧妙に覆い隠されていた。しかし、最後になって、物語を終わらせるためではあったが、お遊さんの再縁後、一年たつて蘆間の男が生まれたという事実を「わたし」の口から語らせてしまったのである。

まとめ 父親の役割と併せて

以上、「蘆刈」において、「わたし」がお遊さんの年齢を推定したことを考察して、それが到底「わたし」が知れない事実であるということに到達した。本来、それは「わたし」が口にして語るべきではなかった事実だが、物語全体を終わらせるために、蘆間の男をどうしても退場させる必要があった。それが、「わたし」の矛盾する発言に繋がり、それが図らずも事実を露呈させた。蘆間の男はお遊の妹、おしずが、姉の再縁後に芦橋慎之介と「ちぎり」を結び、生まれた息子であった。

包み隠されていた事実が姿を現してしまったわけだが、このような発言が「暴露」となることを、谷崎は想定していなかったと思われる。すべてを細かくは語られない「蘆刈」は様々な想像を可能にしていたわけで、秦恒平の「お遊さん実母説」も、そのような読みを可能とする「蘆刈」の構造によって突き動かされていた。

ただ、「蘆刈」において、お遊さんが蘆間の男の実母である必要性はない。たつみ都志は「むしろ、実母であつ

てはならない」として「慎之助は、自分のなきあと、自分の性を息子に生きてもらい、折あらば、自らは遂げられなかった夢を、自分と血のつながった男に遂げてもらいたかったのではないか。」と述べる⁽¹⁵⁾。

このような、父と息子の物語は、実は「蘆刈」と発表年代に近い「吉野葛」にも現れていた。ここでは津村が自身の母の血脈を訪ねて吉野を旅し、最後に母の遠縁である女性に巡り合う。

この津村が、母の血脈を探し求めるきっかけになったのが、父と母のやり取りの手紙であった。祖母の死後に土蔵の中で津村は父と母との間に交された艶書を見つける。この手紙が見つかったことを一つのきっかけとして、津村は母への想いを激しくし、その由来を辿る行動へと踏み出していく。

「蘆刈」では慎之助が自身の自身の想いを引き継がせようとする。「お遊さまのことをわすれずにいておくれよ、己がこうして毎年おまえをつれてくるのはあのお方の様子をお前におぼえておいてもらいたからだ」と慎之助は述べるが、蘆間の男はそれを忠実に守り、お遊さんへの想いを保ち続ける。ここに性の問題が絡む以上、たつみはお遊さんが実母であってはならないとし、「継母」として、「実母の欠落した部分にイメージとして入り込んだ母」とする。たつみの論とは別の道筋で、本論は蘆間の男がお遊さんの産んだ子ではなかったことを証明した。

本来の「蘆刈」はこのような、隠された真実を物語の底に置いたまま、秦恒平の言うような、「母恋い」の物語としても読める要素も十分に備えたものとして予定されていたのだろう。蘆間の男と「わたし」のやり取りはそれを象徴している。

さようでござります、でござりますからおしずは私わたくしの母、お遊さんは伯母になるわけです。れどもそれがそう簡単ではないのでござります。

含みを持つ男の言葉から、秦がお遊さん実母説を唱えたのも尤もなことと考えられるし、また、この物語はそういうにも読めるように描かれていた。お遊さんが蘆間の男の母とも取れるところは、お遊さんが蘆間の男の実母かどうかとは別に、母恋いの物語の要素を持つものとして意図されていたからと思われる。それを踏まえて谷崎は蘆間の男が語る内容を精選して臆化させ、お遊さんが実母であつてもおかしくないような語りを表現した。しかしその苦心が最後になって破れ、「わたし」の発言から事実が読み取れてしまう結果に陥ってしまったのである。蓮實重彦は前掲の『魅せられて』で次のように述べる。

小説家というものは無邪気なまでに大胆で、その種の語彙的な配慮をあるところまで心がけているかに見えながら、その種の構造的な自粛を最後まで維持することに到底耐えられない存在なのだ。

蓮實が言及したのは「吉野葛」に対してであつたが、同様の事象がこの「蘆刈」にも現れていた。この点に、この時期の谷崎が模索し、陥つた共通の現象が見て取れるというのも注目すべきことであろう。

今回は「わたし」が発言した「八十ぢかい」という言葉について作者と「わたし」の距離感についての考察を行ったが、このような事例は「わたし」による他の記述にも隠されている可能性がある。そこを更に掘り起こすことで、「蘆刈」の更なる可能性が見えてくると思われる。今回は紙数が足りないもので、今後の課題とすることで筆をおかせていただく次第である。

引用した作品の本文はそれぞれの初出による。ただし「雪後庵夜話」は「雪後庵夜話」(中央公論社 昭和四十二年十二月)による。なお、旧字体は新字体に改めた。

注

- (1) 河野多恵子『谷崎文学の愉しみ』(中公文庫 中央公論社 平成十年二月)
- (2) 里見弴「作家から作家へ―文芸時評―」(『文芸春秋』 文芸春秋社 昭和八年一月)
- (3) 川端康成「文芸時評―異常な性生活を描いたたわいのない三作―」(『読売新聞』 昭和七年十一月二十九日)
- (4) 正宗白鳥「文芸時評」(『中央公論』 昭和八年七月)
- (5) 川端康成「文芸時評」(『新潮』 昭和八年七月)
- (6) この他に日時を特定した論としては五味淵典嗣の「漱石を裏返す―『蘆刈』再読」(『谷崎潤一郎読本』五味淵典嗣 日高佳紀 編 翰林書房 平成二十八年十二月)があり、「一九三二年九月十五日」と日付も明言されている。ただ、特定した理由についてまでは、論内で示されていない。塩崎文雄は『蘆刈』余影(『日本文学』41巻12号 平成四年十二月)で、「一九三二年九月十五日が仲秋の名月と指摘しているので、そこに拠ったものであろうか。」
- (7) 『京都市政史』上巻(京都市編 昭和十六年)に拠る。この時に一市二十六町村が合併して京都市となった。なお、既に塩崎文雄の前掲論文に指摘があるが、「蘆刈」で「山崎も去年の京都市の拡張以来大都会の一部にへんにゆうされた」とあるのは誤りであり、山崎は令和の現在でも京都府乙訓郡大山崎町として単独町制を施して存在している。
- (8) 『京阪70年のあゆみ』(京阪電気鉄道編 昭和五十五年四月)では、昭和三年十一月一日に「新京阪鉄道 高槻町・京都西院仮駅間開通」と記されている。
- (9) たつみ都志『ここですやろ谷崎はん』(広論社 昭和六十年三月)によれば、谷崎自身は現在の神戸市東灘区岡本七丁目十三番八号に昭和三年の春から昭和六年の五月まで住まいをした。「わたし」を谷崎に比定すれば、「まだおかもとに住んでいたじぶん」はこの時期と考えられる。また、この家からの最寄り駅は阪急岡本駅になるので、地理的な問題としても、岡本駅からの乗車が自然であろう。
- (10) 『神戸新聞』(昭和五年五月二十六日)に「京阪と新京阪の両電鉄合併成立」とあって、両者の合併が報告され、「実行期日は来る九月十五日」ともある。
- (11) 『大辞林』(三省堂 昭和六十三年十一月)
- (12) 『国語大辞典』(小学館 昭和五十六年十二月)

(13) 『大辞林』も『国語大辞典』でも「数年」の概念を「二、三年」乃至は「五、六年」と説明している。「何年」を「五、六年」として捉えた場合、想定される蘆間の男の年齢が五十二歳から五十四歳となり、「五十に近い」「わたし」と「同年輩」からは外れると思われる。ここは「二、三年」という幅で捉えた方が至当であろう。

(14) 秦恒平は「お遊さま」わが谷崎の『蘆刈』考(『海』8巻7号 中央公論社 昭和五十一年七月)で、「蘆刈」発表当時の谷崎が四十七歳だったことを理由に、蘆間の男も四十七歳として論を進めている。しかし、先にも述べた通り「わたし」は谷崎そのものではないので、「よはひ五十に近い」「わたし」が必ずしも四十七歳というわけでもなく、「わたし」と同年輩に見える男が、実際に四十七歳というわけでもないだろう。本論では男の言葉が真実であるという前提で、四十八歳から五十一歳までの幅をとって考えている。この範囲なら、「よはひ五十に近い」「わたし」と蘆間の男が同年輩であつてもおかしくはないと考えられる。

(15) 秦恒平 注(14) 前掲論文に拠る。

(16) 秦恒平は注(14) 前掲論文の中で蘆間の男が私の「八十近いとしより」という発言に答えると、「わたくしはおしづの生んだ子なのでござります」という嘘が割れてしまうからと述べ、お遊さんは「八十近いとしより」ではないとして、蘆間の男の生母である根拠としている。川島淳史も『蘆刈』 試論―偽装の語りと〈水無瀬見聞記〉の中で、蘆間の男が消えたのは「わたし」が「男のウソ」の急所を突いたからだとする。ここでも川島はお遊さんが「八十近いとしより」ではないとする。

(17) 上田真「国際日本文学研究集会会議録」(国文学研究資料館『国際日本文学研究集会会議録』第十号昭和六十二年三月)
(18) たつみ都志「継母思慕構造としての『蘆刈』」(『昭和文学研究』五巻 昭和五十七年)

(ふくだ・ひろのり／愛知県立津島東高等学校教諭)